



ただ一つの防壁—聖書

崩されつつあるプロテスタントの一大原則

大争闘シリーズ No.9



大争闘シリーズ No. 9

ただ一つの防壁—聖書

崩されつつあるプロテスタントの
一大原則

(キリストとサタンの大争闘 37 章)

目次

Contents

聖書に対するサタンの攻撃	1
すべての教理と信仰の基準	4
自分で調べよ	9
正しい道標 <small>みちしるべ</small> のもとに	12
聖書の学び方	15
み言葉をたくわえよ	18
懐疑論のわな	20
世界の運命	22

はじめに

命をかけてプロテスタントは、「聖書、聖書のみが基準」であることを勝ち取ったが、再び危機が訪れてきた。

「聖書にこう記されている」よりも、人間の哲学、神学、教会の解釈、権威に服するようにマインドコントロールされる危機がキリスト教会にもありはしないか。

「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうする時に、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである」。

聖書に対するサタンの攻撃

「ただ律法^{おきて}と証^{あかし}とに求めよ、もし彼らが、この言葉によって語っていなければ、それは、彼らのうちに光がないからである」(イザヤ 8:20 欽定訳)。神の民は、偽りを語る教師の影響や悪霊の欺瞞的力に対抗して、聖書を彼らの防壁とすることを教えられた。サタンは、ありとあらゆる手段を尽くして、聖書の知識を獲得しようとする人々を妨げる。なぜなら聖書の明白な言葉は、彼の欺瞞を暴露するからである。神の働きが復興するごとに、悪魔はますます強烈な活動を開始する。彼は今や、キリストとその信徒たちに対する最後の争闘において、全力を傾けている。最後の大欺瞞が、間もなく我々の前に展開されようとしている。偽キリストが、我々の目の前で驚くべき働きをなすに違いない。偽物が非常によく本物に類似しているので、聖書による以外には両者を見分けることはできない。すべての論述や奇跡は、聖書の証によって

吟味されなければならない。

神の戒めのすべてに従おうと努力する者は、反対と嘲笑に会うであろう。彼らは、神によってのみ立つことができる。彼らが目の前にある試練に耐えるためには、み言葉の中に示されている神のみ心を理解しなければならない。彼らは、神のご品性、統治、御目的について正しい理解を持ち、それに従って行動するときのみ、神を崇めることができる。聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、誰も最後の大争闘に耐え抜くことはできない。わたしは人に従うよりは神に従うべきか、という鋭い質問が、一人一人に臨むであろう。その決定の時は、今、目の前に迫っている。我々の足は、果たして神の不変の言葉という岩の上にしっかりと立っているだろうか。我々は、神の戒めとイエスの信仰の守護のもとに、堅く立つべき準備をしているだろうか。

救い主は十字架におかかりになる前に、ご自

分が死に渡され、墓からよみがえられることを弟子たちに告げられた。そして、天使たちも現れて、主のみ言葉を人々の心の奥に印象づけることに努めた。けれども、弟子たちは、この世においてローマのくびきから救われることを待望していた。そのために、彼らの望みの中心で



ある主が、不名誉な死をお受けにならなければならないという思いに耐えられなかった。彼らが覚えていなければならなかったみ言葉は、その心から消え失せ、悩みの時が来たときには、彼らは準備ができていなかった。イエスの死は、まるで主が何の予告もしておられなかったかのように、彼らの希望を徹底的に打ち砕いたのであった。キリストのみ言葉によって、弟子たちに未来がはっきり示されていたように、我々に

も預言の中に未来のことがはっきりと示されている。恩恵期間の終わりに関係のある出来事と、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている。しかし多くの者は、全然啓示を受けなかったかのように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとうかがっているので、彼らは、悩みの時に対して少しも備えができていない。

すべての教理と信仰の基準

非常に重大であるために、中空を飛ぶ聖天使たちによって宣べ伝えられたと表現されているほど重要な警告を、神が人々に



お送りになるとき、神は理性を持つすべての人が、その使命に深い注意を払うことを求めておられる。獣とその像を拝むことに対して宣告されている恐るべきさばき(黙示録 14:9-11 参照)について知るとき、誰でもみな、獣の刻印とは何か、それを受けないようにするにはどうすればよいかということを学ぶために、熱心に預言を研究するようになるはずである。しかし大部分の人々は、耳をそらして真理を聞かず、作り話を好んで聞く。使徒パウロは終末の時代に関して、「人々が健全な教に耐えられなくな」と述べた(Ⅱテモテ 4:3)。その時がちょうど到来している。多くの人々は、聖書の真理を好まない。なぜなら真理は、罪深い、世を愛する心の欲望を、妨げるからである。そこでサタンは、彼らの好む偽りを提供するのである。

けれども神はこの地上に、すべての教理の基準として、またすべての改革の基礎として聖書を、しかも聖書のみを支持する一つの民を必

師や神学者たちを仰ぐように彼らを教える。そうするとき、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである。

キリストがこの世にあって生命のみ言葉を語られたとき、一般の人々は喜んでこれに聞き従った。そして多くの人々が、祭司や役人たちでさえ、主の言われることを信じた。しかし、祭司長と民の有力者たちは、主の教えを非難し否認することを決意していた。彼らは、キリストに対する言いがかりを見いだそうとして全力を尽くしてみたが、ことごとく失敗し、主の言葉に伴う神の権威と知力とを感じないではいられなかったにもかかわらず、なお自分自身の偏見の中に閉じこもった。彼らは、キリストの弟子として引き入れられることを故意に避けるために、キリストがメシヤであることの最も明白な証拠を拒んだ。これらイエスの反対者たちは、当時の人々が子供の時から尊敬するよう

に教え込まれ、また彼らの権威の前には絶対服従するように習慣づけられていたところの人たちであった。人々は言った。「我々の役人たち、学者たちがイエスを信じないのはどういうことか。もし彼がキリストならば、この神を敬う人たちが彼に従わないことがあるか」と。ユダヤ民族に彼らの贖い主を拒否させたのは、このような教師たちの影響であった。

これらの祭司や役人たちを動かした精神は、今日もなお、深い敬虔を装う人々によって表されている。彼らは、現代に対する特別な真理について、聖書の証を探求することを拒むのである。彼らは、自分たちが多数であることや、富や、人気を指摘し、真理の擁護者に対しては、世からかけ離れた信仰を持つ少数で貧困、不人気な者として、軽蔑の目で見るのである。

自分で調べよ

キリストは、学者やパリサイ人が欲しいままにした権力の不当な^{しょうあく}掌握が、ユダヤ人が離散してもなお消滅



するものではないことを予見された。キリストは、人間の権威が崇められて良心を支配し、それが各時代の教会にとって恐るべき災いとなることを、預言の眼をもってごらんになった。そして学者やパリサイ人に対する彼の恐るべき非難、またこれらの盲目的な指導者に追従しないようにとの民に対する彼の警告は、後の時代に対する訓戒として記録された。

ローマ教会は聖書解釈の権利を、聖職者に委ねた。聖職者だけが、神の言葉を説明する資格があるという理由のもと、一般大衆はみ言葉を

与えられなかった。宗教改革によって聖書は万人のものとなったが、ローマによって支持された同じ原則が、プロテスタント諸教会の多くの人々を妨げ、自分で聖書を研究させないようにしているのである。彼らは、教会によって解釈されたものとして聖書の教えを受け入れるように教えられる。こうして、聖書の中にどんなに明らかに示された事柄であっても、自分たちの信条やその教会の規定に反する場合は、一切信じようとししない人々が数多くいるのである。

聖書の中には偽教師に対する警告が満ちているにもかかわらず、多くの人々は、このようにして、すぐに自分たちの魂を牧師に預けてしまう。今日、信仰を告白する幾千の人々は、牧師からそう教えられたということ以外に、自分の信じる信仰の要点について理由を説明することができない。彼らは救い主の教えにほとんど注意を払わず、牧師たちの言葉に絶対的な信頼を置くのである。しかし、牧師は絶対に誤りを

犯さない者であろうか。我々は、彼らが光を掲げる者であるということを、神のみ言葉によって知らない限り、自分の魂を彼らの指導に委ねることがどうしてできようか。世の踏みならされた道から踏み出す精神的な勇気が欠けているため、多くの人々は学識者の道に従い、自ら研究することを非常に嫌って絶望的なまでに誤謬の鎖につながれている。彼らは、現代の真理が聖書の中に明らかに示されていることを認め、また、そのみ言葉に伴う聖霊の力に気づくのであるが、牧師たちに反対されるままに光に背いてしまう。理性と良心では確信していながら、これらの欺かれた人たちは、あえて牧師と違った考え方をしようとしなくて、個人的な判断と、自分たちの永遠の利益を、他人の不信仰や誇りや偏見の犠牲にしてしまうのである。

みちしるべ 正しい道標のもとに

サタンが、人間の影響力を通して人々を捕虜として縛っておく方法は、たくさんある。彼は、愛情という絹ひもで多くの人々をキリストの十字架に敵する者に結びつけることによって、彼らを自分の側に確保する。この愛着が、親子、夫婦、あるいは社会的なものであろうと、その結果は同じである。真理の反対者たちが、良心を支配しようと影響力を及ぼすので、彼らの支配下に捕えられている魂は、義務に関する自分自身の確信に従うだけの勇気や独立心を持っていない。



真理と神の栄光とは、切り離すことができない。我々は、手近に聖書を持っていながら、誤った見解の下にあるならば、神のみ栄えをあらわ

すことはできない。生活さえ正しければ何を信じてかまわない、と多くの人々は主張する。けれども、生活は信仰によって形造られるものである。光と真理が手近にありながら、それを聞き、それを見る特権を利用するのを怠るなら、我々は事実上それを拒絶し、光よりも闇を選んでいることになる。

「人が見て自分で正しいとする道があり、その終りはついに死にいたる道となるものがある」(箴言 16:25)。神のみ心を知る機会が、多分に与えられているにもかかわらず、知らないということは、誤りや罪の言い訳とはならない。ある人が旅行をしている時、いろいろな分かれ道に出くわしたとする。そこには各々の行き先を示す道標がある。もしもこの人が、道標を無視して、自分で正しいと思う道を選ぶならば、彼がいかに誠実であっても、自分が間違った道を歩いていることにおそらく気づくであろう。

神は、我々が神の教えに通じ、神が求めて

おられることを自分で知ることができるようにと、み言葉を我々にお与えになっている。律法学者がイエスのところに来て、「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」と尋ねた。救い主は聖書を引用しながら、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」と言われた。知らなかったということは、若い者にも年寄りにも言い訳にはならないし、神の律法を犯した当然の刑罰から免れさせるものでもない。なぜなら、彼らは、律法とその原則、その要求について忠実に書いてあるものを、手に持っているからである。正しい意図があったというだけでは足りない。人は、自分が正しいと思うことや、牧師が正しいと教えることを行うだけでは不十分である。自分の魂の救いに関わる問題である以上、人は自分で聖書を探求しなければならない。彼の確信がどんなに強くても、牧師は何が真理であるかを知っているといくら彼が信賴していても、それは彼の土台とはならない。彼は、天への旅路におけるすべての道標を示す

地図を持っているのであるから、何事も憶測によるべきではない。

聖書の学び方

聖書から真理を学び、その光のうちに歩み、そして他人にも自分の模範に従うように励ますことは、すべて理性のある者にとって第一にして最高の義務である。我々は日々熱心に聖書を学び、その意味をよく吟味し、聖句と聖句とを比較研究しなければならない。我々は神の前において自分で答えられるように、神の助けによって自分で自分の考えを定めなければならない。

聖書の中に最も明白に示されている真理が、学者たちによって疑いと暗黒に包まれてきた。彼らは、偉大な知恵を持っているように見せかけながら、聖書には、そこに用いられている言葉に現れていない神秘的で霊的な隠れた意味が

ある、と教える。これらの人々は偽教師である。イエスが「あなたがた……は、聖書も神の力も知らないからではないか」と言われたのは、こういう種類の人々に向かってであった（マルコ 12:24）。聖書の言葉は、象徴や比喩が用いられていない限り、その明瞭な意味に従って解釈されるべきである。キリストは「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が……わかるであろう」と約束された（ヨハネ 7:17）。もし人々が、聖書をその書いてある通りに受け取りさえすれば、もし人々を誤らせ、その心を混乱させるような偽教師がいなければ、天使を喜ばせずにはおかない働きが成し遂げられ、現在誤謬の中に迷っている幾千の人々が、キリストのもとに導かれるであろう。

我々は、聖書の研究に、全力を尽くさなければならぬ。人間として及ぶ限り、神の深きことを理解するために知恵を働かせなければなら

ない。しかし、幼な子のような従順と服従とが、
学ぶ者の真の精神であることを忘れてはならない。
聖書の難解なところは、哲学上の諸問題を
解くために用いるのと同じ方法では決して解決
されない。科学の
領域において、多
くの人々が抱いて
いるような自己信
頼をもって聖書を
研究してはならな
い。むしろ祈りの



うちに神により頼む思いと、神のみ心を知りたいというまじめな願いをもって、これに当たるべきである。へりくだり、素直な精神で、「わたしは有る」という偉大な神から知識を獲得するために、みもとに行かなければならない。そうでないと、悪天使は我々の頭をくもらせ、我々の心をかたくなにして、真理から感銘を受けないように働くのである。

聖書の中で、学者たちが不可解であると断言し、また重要でないものとして見逃している多くの部分は、キリストの学校で教えられた者にとっては慰めと教訓に満ちている。多くの神学者が神のみ言葉について明快な理解を持っていない一つの理由は、彼らが、自分の実行したくない真理に対しては、目を閉じてしまうからである。聖書の真理に対する理解は、研究に払われる知力によるよりは、むしろ誠実な意図と、義を熱心に追い求める心とにかかっているのである。

み言葉をたくわえよ

聖書は、祈りなしに研究すべきではない。聖霊だけが、理解しやすい事柄の重要性を感じさせ、あるいは理解の困難なものを曲解しないように守る。我々がみ言葉の美しさに心をひかれ、その警告に戒められ、またその約束によって活

気づけられ、力づけられるように、心を備えさせて神のみ言葉を理解させるのが、天使たちの働きである。我々は詩篇記者の「わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちのくすしき事を見させてください」という訴えを、自分のものとしなければならない(詩篇 119:18)。しばしば誘惑が抵抗できないもののように見えるのは、祈りと聖書研究を怠っているために、試みられている者が神のみ約束をすぐに思い出すことができず、聖書という武器をもってサタンに対抗することができないからである。しかし天使たちは、神の事柄を喜んで学ぼうとする人々の周囲に群がり、緊急の場合には必要な真理を思い起こさせる。こうして、「敵が洪水のように押し寄せるときに、主の霊はそれに向かって旗をあげられる」(イザヤ 59:19 欽定訳)。

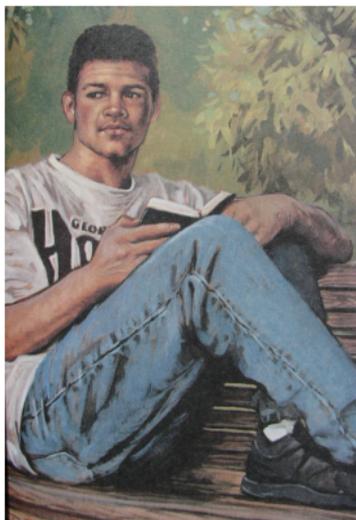
イエスは、「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話してお

いたことを、ことごとく思い起させるであろう」と弟子たちに約束された(ヨハネ 14:26)。けれども危機の際、聖霊が我々に、キリストの教えを思い起こさせて下さるためには、それをあらかじめ心の中に蓄えておかねばならない。ダビデは、「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」と言った(詩篇 119:11)。

懷疑論のわな

自分の永遠の利益を重んじる者はみな、懷疑論の侵入に対して警戒しなければならない。真理の柱そのものが攻撃されるであろう。現代の不信仰の風刺や詭弁きべん—狡猾こうかつで有害な教え—が届かないところに身を置くことは、不可能である。サタンは、その誘惑をすべての階級に向ける。彼は、冗談や嘲笑をもって無学な者を攻撃する。一方教養ある者には、科学的反論や哲学的推論

をもって対抗するが、どちらも聖書に対する不信と軽蔑心をかき立てようとねらっている。経験の浅い青年でさえも、キリスト教の基礎的原理に関して懐疑をほのめかすようになる。こうした青年期の不信仰は、それ自体は軽微なものとはいえ影響力を持っている。多くの者は、このように父祖たちの信仰をあざ笑い、恵みのみ霊を侮るように導かれる。神の栄えとなり、世に対して祝福をもたらすと思われた有能な多くの人々の生涯が、不信仰の汚れた空気を吸うことによって損なわれてきた。人間の理性による高慢な結論に頼って、自分たちは神の知恵の助けなしに聖なる神秘を説明し、真理に到達できると思う者はみな、サタンのわなにかかるのである。



世界の運命

我々は、世界史上、最も厳粛な時代に生存している。地上のおびただしい数の人々の運命が、決定されようとしている。我々自身の将来の幸福も、また他の人々の救いも、我々が今歩んでいる道にかかっている。我々は、真理のみ^{たま}霊によって導かれる必要がある。キリストに従う者はみな、「主よ、わたしは何をしたらよいのでしょうか」と熱心に尋ねるべきである。我々は、断食と祈りとをもって主の前にへりくだり、主のみ言葉について、特にさばきの光景について多く瞑想する必要がある。我々は今、神のことについて、深い、生きた経験を求めなければならない。一刻もむだにはできない。極めて重大な事件が、我々の周囲に起こっている。我々はサタンの魔法の働いている場にいるのである。神の見張り人たちよ、眠ってはいけない。敵は近くに忍び込んでいて、あなたが気をゆるめて眠気を催すならば、いつでも飛びかかって餌食

にしようと待ち構えている。

多くの者は、神の前における自分の真の姿について欺かれている。これらの人々は、自分たちは悪事を行っていないと喜んでいるが、神が彼らに要求され、しかも彼らが実行することを怠った、善にして高潔な行為のことを数えるのを忘れている。彼らは、単に神の庭における樹木であるだけでは足りない。彼らは実を結ぶことによって、神のご期待に応じなければならない。自分を力づけてくれる神の恵みを通して、することができたはずの善行をしなかった責任を、神は問われる。天の書に、彼らは地上における妨害者と記される。しかしこの種の人々でさえ、全く望みがないわけではない。神の慈愛を軽視し、神の恵みを悪用したこれらの人々に、忍耐深い愛の神のみ心は、『眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう。』そこで、あなたがたの歩きかたによく

注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである」と訴えておられる(エペソ 5:14-16)。

試練の日が来るとき、神のみ言葉をその人生の基準としてきた人たちが、はっきり分かるであろう。夏には常緑樹と他の樹木との間に著しい違いはないが、冬のこがらしが吹く時になると、常緑樹は変わらないが、他の木々は葉が落ちて裸になる。そのように、現在は心に偽りのある信者と真のキリスト者との見分けがつかないが、しかしその違いが明らかになる日が、今まさに我々に臨もうとしている。反対が起
こり、頑迷^{がんめい}と偏狭が再び吹きまくり、迫害の火が燃やされるとき



に、二心の偽善者たちは動揺して信仰を放棄するであろう。しかし真のキリスト者は岩のように堅く立ち、彼らの信仰、彼らの希望は、迫害のない平和な時よりも、さらに強くさらに輝けるものとなるであろう。詩篇記者は次のように言っている。「わたしはあなたのあかしを深く思う。」「わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます」(詩篇 119:99,104)。「知恵を求めて得る人、悟りを得る人はさいわいである。」「彼は水のほとりに植えた木のようで、その根を川にのぼし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ」(箴言 3:13、エレミヤ 17:8)。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E. G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com